



Title	宋元版の話
Author(s)	内藤, 虎次郎
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 13-22
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88832
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

宋元版の話

内藤虎次郎

支那の版本の研究は近年大分盛になつて來た。版本の起源に就ても同様である。我邦の文献に支那版本の事が最初に見ゆるのは、東寺の圓載の請來目錄の中に、西川即ち蜀の印本の廣韻と玉篇とが見ゆるのがそれである事に、禿氏祐祥君が大分前に氣付かれた。近頃石田幹之助君が新聞に書いて居る中に、支那のわかい學者で向達といふ人が版本を研究したのを引用して居るが其中にも禿氏君の事に言及して居る。其他、數年前市村瓚次郎博士が全唐文の中に、曆の版の事を見付けたのを發表されたが、神田喜一郎君は、それは冊府元龜に出て居るのを全唐文が採つたのだといふ事を發表した。即ち唐の文宗の太和九年の事で、此年、東川監察使馮宿なる者が上奏して、曆の版を民間で印刷するので、之を禁じたいと請ふて許されたといふ風に全唐文に見ゆる。全唐文には年月が無いので、市村博士は馮宿の年代に就ていろ／＼考へられたが、神田君は冊府元龜に太和九年十一月とあるから其年月は始めから分つて居るといはれたのである。藤田劍峯博士も市村博士の考を批判されたが、やはり其根本たる冊府元龜には氣付かなかつたらしい。處でおかしいのは、馮宿が疏を上つて、天子が之を禁じた様に全唐文には見えて居るが、全唐文は清朝の嘉慶年間にいろ／＼な本から引出して纂修したもので

御用學者の受負仕事なので粗漏にも上奏文でもないものを上奏文なりとい、加減に決めて了つたものである。冊府元龜に據ると、太和九年十二月東川節度使馮宿奏すとて「勅に准じて曆日の版を印すること、を禁せり」とあつて、それは劔南、東川、西川、淮南各道で版印の曆日を市に賣つて居るのを禁せしめる勅に准じて禁じたものである。併し勿論どちらでも結果は同じ事である。之は舊唐書の文宗紀にも太和九年十二月丁丑勅、諸道府不得私置曆日板とあるので、向達は之を見付け出して研究した。冊府元龜では卷一百六十帝王部の革弊の項にある。以上は印刷の事が年月を具へて支那の記録に見えて居る最初である。市村、藤田の兩博士は支那の印刷の起源が我が百萬塔の陀羅尼よりも早いと言はれたい爲の研究の方針を取て居られるが、この太和九年でも百萬塔陀羅尼より六十餘年も遅く、實は、現存して居るもの、且年月のはつきりしたものでは、矢張り百萬塔のが最も古い。

扱、宋版に就ては、内典の方の版の事は、あと廻しとして、先づ外典の方から先に話すこととする一般に宋版、元版といひ、又北宋版、南宋版、元版、明版といふが、版式から云ふと、此分け方は面白くないので、少しく區分法を變へる必要がある。宋時代は太祖、太宗、眞宗、仁宗、英宗、神宗、哲宗、徽宗、欽宗、高宗、孝宗、光宗、寧宗、理宗、度宗、恭宗、元代は世祖、成宗、武宗、仁宗、英宗、泰定帝、明宗、文宗、順帝、明代は太祖、惠帝、成祖、仁宗、宣宗、英宗、景帝、英宗、重祚、憲宗、孝宗、武宗、世宗、穆宗、神宗等であるが、之を版式で分けると、宋の太祖より神宗頃まで、哲宗より光宗頃まで、寧宗より明の宣

宗頃までが各々一時期を爲して居る。最も古い版本は、南禪寺並に東京の中村不折氏にある宋の開寶八年の藏經零本が宋の太祖の時のものであり、又近頃杭州の雷峯塔の中から出た寶篋印陀羅尼が矢張り開寶の時のものである。その頃の外典では現存して居るものは無い。敦煌出土品は唐末、五代のものだが、外典のものでは宋以前のものは少ない、但し五代の時、外典特に經書の出版が汴京や蜀で行はれたと云ふことが傳へられて居るが、蜀には古くから印刷が出来る特別の事情があつたらしい、敦煌に残つて居るものは何處の地方のものか明かでないが、其の一つはたしかに蜀でないらしいものもある。五代の時、蜀の母昭裔が經書を出版し、又汴京で馮道といふ宰相の命で出版したと記録にあるが實物は現存しない。現存するもので自分で見て居る最も古いのは史記で、太宗眞宗の間のもので官板なりと思はれる。それは文字の缺畫で分る。一體天子の諱の缺畫は、その當時の天子から行ふといふのと、その前の天子から缺くといふのと兩説あつたが、自分の藏本中、年號の明かなものに據つて調べて見ると當時の天子の諱は缺畫しない事が分つた。家藏の紹興年間の板の毛詩正義及史記集解で見ると、高宗の構の字が缺畫して居ない。家藏の北宋本史記は眞宗の恒の字を缺畫して居ないから即太宗か眞宗かの時のものであらう。太宗より神宗頃までは先づ版式が一樣であると思はれる。その字體は歐陽詢の風を主として、まゝ顏真卿の如き字もある。此頃の刻本は極めて稀で、宮内省圖書寮の通典は英宗、神宗頃の刻本、廣韻、玉篇は神宗頃の刻本で古い方である。宮内省の御注孝經も矢張り仁宗

の時の刻本である。次の時代、即哲宗より南宋の光宗頃の間の刻本は、印刷が盛になつて來たので餘程澤山現存して居る。前田家にある重廣會史がその中では古い。之は朝鮮より日本に渡つて來たもので、朝鮮では高麗より李朝まで傳はつたものであるが、文祿の役の時、日本軍は朝鮮の本をすつかり日本へ持つて來たので、今日では朝鮮には宋版は殆んど無い。征韓諸將の中で最も多く持つて來たのは浮田秀家であつた。自分の知る所では、現在朝鮮の奎章閣には唯一部の宋版古史があり、民間には蔡邕獨斷の南宋本があるのみである。圖書寮の通典と前田家の重廣會史とは矢張り文祿の時の將來品の一つであらう。此の二書には並に「高麗國十四葉辛巳歲藏書大宋建中靖國元年大遼乾統元年」といふ印がある。我邦には他にも此印のある本があつて、之が古板研究の一つの標準となる。之より光宗の紹熙頃までは大體同じ式である。それから孝宗(乾道、淳熙)光宗(紹熙)の時代は、次の寧宗の時の慶元版までの過渡期で、之を中期とする。慶元より元代をかけて、明の宣宗(宣德)頃までは大體様式が一つである。中期の字體も大體歐陽詢の筆法であるが、字形が上期の長方形からやゝ變じて方形となつて來る。其後は褚遂良様とも云ふべき字體が明の宣德まで續いた。故に慶元以後は、宋版、元版、明初の版の區別を誤り易く、支那の悪い本屋は年號の本記を取り去つて時代を上げて高く賣つたりする。以上は様式上の概略の區分法である。但し元代は之を前期後期に分ける。前期は南宋版と同様であるが、後期にはその字體に柔媚にして肥れた趙子昂の書風が表はれて來て居る一種の様式がある。

家藏の汲古閣舊藏の中原音韻がこの様式の本で、元の泰定帝頃の版であるが、其風が明の弘治頃まで續いて居る。尙又黒口本が此種のものには多い。

古版が貴ばれたのは随分古くからの事であるが、古版の研究をして之を學問に應用したのは餘り古くはない。日本に於ては約二百年この方の事である。享保中に山ノ井鼎(崑崙)が七經孟子攷文を作つた頃から始つたと云へるが、其頃は未だ古版にひごく趣味を持つて居たとは云へない。山井崑崙は荻生徂徠の弟子である。其後水戸の人、吉田篁墩が大に古版の研究をやり、此頃から盛になつて來た。支那では清朝の初から古版の研究はあつたが、それを學問上に盛んに應用したのは却て日本より晚く七經孟子攷文が支那へ渡つて後、即乾隆の中頃からである。従つて古版の長所を學問に應用する事は日本人の方が支那人より上手になつて居たらしい、近頃有名な楊守敬なども日本へ來て森立之、向山黃村、寺田望南などから古版の事を聞いて古版學者になつた位である。併し、明治初年以後は此學問も大分衰へて、自分より年長の人では寺田一人で多分今以て存命であらう。自分と同時代の人では島田翰があるだけであつたが早世した。島田君は其便宜もあつたからではあるが、わかい時から古版の鑑賞には仲々秀でゝ居た光緒の末年支那の各省の提學使が十數人日本へ來て、其中には校勘學の大家も數人居つたが、皆島田に散々翻弄されたものであつた。古版の鑑賞と校勘學とでは吉田篁墩が近代の元祖として最も重なる人であるが、其後では近藤重藏が優れて居る。彼は徳川家の紅葉山文庫(即ち

今の圖書寮の祖の書物奉行であつた爲に非常によく本を觀た。其代り、島田と同様、彼もその本の鑑識力を盛に惡用した。狩谷掖齋が近藤の死んだ時、京都の藏書家福井氏（丹波守）へ送つた手紙に、彼の事を、人間は殘忍酷薄だが惜しい事をしたと書いて居る。楊守敬は古板の樣本集である留眞譜なるものを作つたが、これは近藤重藏の時代から、かゝる種のはあつたもので、古書鑑賞家は正直にやる人は板本の中から一二枚づゝ影寫して樣本としたものであるが、重藏などは人から本を借りると、一二枚づゝ抜き取つて集めたさへいはれて居る。その集まつたものを楊守敬は買ひ入れて歸つて版にしたのが留眞譜である。島田翰氏もその抜取つた殘りのものを持つて居たが震災の時焼けて了つた。近頃は支那でもこの抜取をやつて居る、清朝の内閣の本を抜取つて五十何種かの古版の見本集を數部作つたが、その一部が東京に來たので自分は之を買つて持つて居る。斯の如く古い本を愛玩するには動もすれば罪惡が伴ふのであるから氣をつけねばならぬ。

又一方近藤重藏や島田翰は古版を鑑賞する法則を發見して斯道に貢獻して居る。正齋書籍考に自慢して「余は古版を見るに習ふ。帝の諱の缺筆より、刻工の名まで、その資料として鑑識が出来る。」と言つて居る。之は近藤が元祖であるが、島田は又盛に之を應用した。此刻工名の研究は内典の本にまで關係があつて、内典、外典を同じ刻工がやつたものを調べてその時代を識別するなど大に役に立つことがある。圖書寮の尙書正義の刻工を島田が調べて、元は北宋本と考へられて居たのが、南宋本で

ある事が分つた。自分は更に其刻工の名と帝諱とを精査して紹熙頃の板だと決めたのである。かやうな研究法は近藤、島田の功ともいふべきもので、古版の鑑定は支那より日本の方が進んで居る。

今一つ注意すべきは、出版所の種類に就てである。官本即ち國子監(大學)地方官署等が出版せるものは大體勅命で出来た最も重要なもので、同時代でも官本と坊本とは様式も異にし、又精粗も著しく違つて居る。例へば家藏の紹興八年の史記集解は毛詩正義よりも一年前のものだが、様式は慶元版と同じである。純粹の官本の他に、司庫本と云ふものがある。之はその版式、校合が官本に次で良いもので、三山の黃唐の易、尙書、周禮、禮記等の註疏が即ち其の種類である。之は地方の役所で金を餘して作るものだが、出版の好きな地方官は餘らないのを無理に流用して作つたりして刑事問題を起した事もあつた。南宋の唐仲友が荀子を出して出版する時に、役所の金を使ひ込んで、朱子に摘發された事があつて、此一件は朱子の文集にくはしく出て居る。併しそのお蔭で我々は荀子の最も良い本を今日に見ることが出来るのである、古逸叢書本の荀子が即ちそれである。次に家刻本、家塾本がある。家刻本といふのは慾を離れて、賣る積りでなく出版するものだが、家塾本は概して賣る積りで、自分の資本で出版せるものである。五經の南宋岳氏本は岳飛の子孫たる岳珂が自分の家塾で版にしたもので、元は九經三傳共にあつたのであるが、近代乾隆帝は其中の五經を集め得たとて五經萃室といふものを作つて誇つた程である。次に坊本であるが、同じく坊本でも、代々學者の續いた本屋の本と、廉

價本を出す本屋の本とがある。前者の例としては建安の余氏本がある。之は北宋より明まで續いた家で、此家から出した本は實に多い。又南宋の郡、杭州の陳氏の本などは坊本も重んぜられて居る。其他書坊本で最も廣く行はれて居るのは建安（福建の建寧府の中）の麻沙鎮といふ町で版にしたもので、之を一括して麻沙本と云ふ、之は殆ど盡く粗本である、坊本は北宋の時からのものが遺つて居るが、南宋頃から本屋が盛んに流布本を出す様になつて、麻沙本が我邦にまで傳播した。又蜀でも多く本を出版した。蜀は唐以來、印刷の盛な地方であるが、外典の有名なものは眉山七史等あり、眉山七史は紹興頃の出版で、其板が明代まで存したもので、南京に遺つて居つた。元の頃になると、各地方の官立の學校、即ち各路儒學本がある。此他に私學で出したものは書院本と云ふ。一般に監本、司庫本、家塾本、書坊本の順序で精粗の次第がつくのである。

古版の事を一通り知るには近頃出來た葉德輝の書林清話を見るがよろしい。日本人の本では近藤重藏の正齋書籍考が可い。葉德輝は楊守敬の惡口を言ひ、楊守敬が日本で見た本は僞物だと言つて居るが、自分の考へでは、葉德輝よりも楊守敬の方が本はよく見わたと思ふ。それ故其の書いて居ることは斟酌して見る必要がある。其他の近頃出たものは信用が置けない。それから經籍訪古志も古版研究の手引になる。之は狩谷掖齋の頃より明治初年までの人の古版研究の清算ともいふべきものであるが日本人は出版しないので、支那公使の徐承祖といふ人が、東京で版にした。之より少し前に出たもの

に市野迷庵の讀書指南があるが、之は古板が目的で書いたのでは無い。狩谷掖齋の活版經籍考も、日本の舊い活版の書に限られて居て宋元版には關係がない。五山板は宋元板の覆刻が多いので、之を研究すると宋元板に發明する所がある。特に宋元版の原刻がなくなつて、五山板によつて之を知ることの出来る者もある。此點は高麗板、朝鮮板にも同様の事がある。

以上は外典に關して述べたが、佛典の事にも一寸觸れて置く。佛典で最も古いのは、前にも一寸申した通り北宋の開寶の時の藏經で、之は蜀版であるが、後に版木を汴京に持つて來て汴京で刷つたものらしい。其後北宋の末、福州開元寺本、福州東禪寺等覺禪院本が出來た。又思溪版なるものがある。思溪版には前後二版ある事が、最近高野山から出た目錄によつて分つた。其他磧沙版があり、又大普寧寺版といふものがあるが、之は元初のものかと思はれる。

以上は藏經の版になつたものであるが、此等は日本のみに傳來して、支那には殘つて居ない。支那では、楊守敬が法金剛院から三千何冊か買つて歸つたものがあるのみである。佛典の古版に就ては、禿氏祐祥、小野玄妙の諸氏が研究して居られる。願はくば研究家が佛典の版式を明にして貰ひたいものである。さうすると外典の研究にも大に役に立つ。例へば、毛詩正義及近年身延で發見された禮記正義は紹興版であるが、之と思溪版の最初の頃の佛典の版本と其字體がよく似て居る。之は同じ刻工がやる爲ではないかと思ふ。宋でも刻は杭州から紹興あたりが最も上手で、次が蜀、福建が最も粗本

を出すと決つて居るらしく、當時の人葉少蘊の石林燕語に見えて居る。この刻工の研究がもつとはつきり分れば、宋版の研究に大に参考になる。元以後は大した事はないが、宋版の事を更に精細に研究すると古版學の基礎になると思ふ。大に後來の士に俟つ所以である。(昭和五年十一月某處講演)

山崎闇齋と保科正之

秋　　月　　胤　　繼

山崎闇齋の門下數千人と稱す。中に諸侯あり學者あり。諸侯中の傑出せるを會津侯保科正之とし、學者中の傑出せるを淺見絅齋、佐藤直方、三宅尙齋の三子とす。然るに上記の淺見絅齋、佐藤直方の二高弟を初とし多くの門人が終りには其師に背き去り師弟の關係を全うせざる間に在りて諸侯の身を以てして最後まで師弟相信孚し終始渝る所なかりしを保科正之とす。闇齋の門下が何故に相率ゐて其師に背き去りしかを考ふるに、一には闇齋の性格が餘りに嚴厲に過ぎ其門人を遇する甚苛酷なりしに起因する如く、又一には闇齋晩年垂加神道を創始し餘りに之に没頭せるに慊焉たりしに起因する如し。